R5年９月 新聞記事（山陰中央新報）

令和5年９月 10 日（日）付　山陰中央新報

紙上ブックトーク

小屋と人とのかかわり

「むかしからずうっとここにたっている　どこかにいきたいとおもったことはない」これは、**『こやたちのひとりごと』**（谷川俊太郎・文、中里和人・写真、アリス館）に登場する小屋のひとりごとです。

この本のページを開くと、田畑や空き地に立つ小屋の写真が並んでいます。さびてボロボロの小屋、草がたくさん生えている小屋、つぎはぎだらけの小屋…。それぞれの小屋たちが語るひとりごと。写真を見ていると、小屋たちがこちらに語りかけてくれるようです。

「そんなこと言う？」と笑えるような言葉や、小屋たちが見守ってくれているような言葉も。どんなことを言うかなと自分なりに考えながら読むのも楽しいですよ。

『黒部の谷の小さな山小屋』（星野秀樹・写真・文、アリス館）の表紙に写っている山小屋からは、どんな声が聞こえてくるのでしょうか。

この山小屋は、黒部の谷底に立つ阿曽原温泉小屋。登山客が泊まる山小屋です。７月の半ばから10月の終わりまで、お客さんを迎え入れ、11月になると、解体します。

なぜ解体するのか？　それは、雪崩で崩れてしまうのを防ぐため。そして、次の年の６月にまた立て直します。

小屋を建て直しているのは、小屋の主人である泉さんとその仲間たち。小屋を立て直す他にも、危険な道を直したり、遭難した人の救助もしています。

ページをめくるたびに、ため息が出そうなくらいの絶景、自然を感じることができます。その景色にひかれて、毎年たくさんの登山者がやってくるのだそうです。

大変なこともあるけれど、黒部に来た人が「こりゃすごいとこだ」と感動する顔を見たいから頑張ることができると泉さん。きっと、泉さんのいる山小屋も魅力のひとつなのでしょう。

一方、こちらの山小屋**『じいちゃんの山小屋』**（佐和みずえ作、カシワイ絵、小峰書店）は、電気もなければトイレもお風呂もありません。もちろんスマートフォンも圏外です。

その山小屋に、おじいちゃんと二人で住むことになった小学生の男の子航太。そんな場所に住むなんてありえないと思う人も多いのでは。

航太も最初はそう思っていました。しかも、おじいちゃんは頑固で厳しく、転校先の同級生ともなじめない。そんな航太でしたが、おじいちゃんにも慣れ、自然の恵みとともに暮らすうちに、航太の気持ちも少しずつ変化していきます。

おいしそうな食べもの、ワクワクするような洞窟。この本を読んでいると、山小屋での暮らしがうらやましくなります。「じいちゃんの山小屋」からひとりごとが聞こえてきました。「たまにはスマホを置いて、山小屋においでー」

（尾崎智子・島根県立大学松江キャンパスおはなしレストランライブラリー司書）

令和5年９月22日（金）付　山陰中央新報

〔11〕

観光や移住が地域豊かに

岩本 晃典さん（島根県立大人間文化学部助教）

観光客や移住者と、地域の人々との交流を研究する。地域住民は外からやって来る人々をどう捉え、また移住者には地元の人々がどう映っているのかに注目する。異なる文化が交わるときに起こるインパクトが地域にどう影響するのかを地域社会学と観光学を合わせた観点で分析する。

過疎高齢化が進む地域で生まれ育ち、高校に進学した際、母校の中学校が廃校になった。自分の居場所がなくなってしまうような日本の現状をどう解決しようか考える中で「地元だけでは立ちゆかない。いろいろな人の手を借りながら、地元を守る仕事に就きたい」と強く思い、観光学に興味を持った。

太学院時代には、好きな場所で好きなことをするといった生活の質（QOL）を追い求めて移動をする「ライフスタイル移住」に着目。従来は移住の理由は進学や転職、親との同居などが占めていたが、若者には地域文化や趣味が移住のきっかけになっている例がある。移動性の高い社会になった今、自由で選択性の高い観光と移住の間で暮らしている人々を追いかけている。

東日本大震災をきっかけに、サーフィンができる環境を求めてある地域に移住し、地域の一員として生活するサーファーの家庭を調査した。移住先は高齢化が進む地域だったが、自然豊かで子育て知識の豊富な地元の人々に囲まれ、収入や利便性だけではない地域の魅力や価値を見いだしながら自分の時間を楽しく生きて暮らしていた。

研究の目的は、住民の交流を通した地域活性化の仕組みを構築すること。「人と人とのつながりによって地域社会はもっと良くなるはずだ」と力を込める。

学生には島根を観光し「今ある当たり前の日常を面白がる天才になってほしい」と願う。小さな豊かさや地域の魅力に気付き、さまざまな視点で現状を見ることができる人材を育てたい。授業をきっかけに、世の中を見るフィルターを増やしてほしいと思っている。

最終的なテーマは「豊かさ」とは何か。コロナ禍で「移動できる豊かさ」に気付けたはずだ。「移動」の自由は簡単に奪われるもの。「きょうの豊かさをきょう感じられるようにしたい」と思いながら日々研究にいそしむ。

（金津理子）

＝おわり＝

いわもと・あきのり　１９９４年、宮崎県串間市生まれ。北九州市立大で地域創生学を学び英国へ留学。北海道大大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻を２０２０年に修了。北九州市立大を経て23年４月から島根県立大人間文化学部地域文化学科の専任助教。